

山梨県における博物館ネットワーク

小島大輔

キーワード：博物館，地域博物館論，博物館地域社会，ネットワーク，山梨県

I はじめに

わが国では、1960年代以降の「博物館ブーム」¹⁾により、博物館の数は急増した。そうした傾向下、徐々に博物館が有する性格に変化が生じた。すなわち、博物館が有する知識を受容し作品を鑑賞する場としての性格に加え、能動的な学習・文化活動の場としての要求が高まりをみせている（福田 1997）。武士田（1990）は、生涯学習社会を迎え、住民レベルでのさまざまな学習活動が展開する中で地域における博物館の役割はますます重要になっていくと述べている。したがって、博物館についての研究は地域教育、余暇行動・観光、コミュニティ活動などの様々な現代的課題を含んでいると考えられる。

戦後の博物館の変化についてまとめた伊藤（1979）によると、1950年代は、「科学知識の普及」という啓蒙主義を軸とし、国立博物館をモデルとしたミニ中央博物館の時代であった。1960年代には、博物館が研究対象とする空間的範囲とサービスの市場圏を統合した範囲を意味する博物館地域社会が見出された。これにより、博物館地域社会の住民は、利用者として客体化され、「博物館と地域社会との結びつき」が課題とされ始めた。さらに、1970年代においてもこの議論は継続された²⁾。

たとえば、1972年には郷土学を掲げる「秋田県立総合博物館基本構想」が作成されている（加藤 2000）。1970年代後半以降には、地域博物館やエ

コミュージアムの議論として展開していった。

地域博物館について、加藤（1977）は、博物館と博物館地域社会との関係にみられる差異に注目し、博物館を地域社会型博物館、観光型博物館および研究型博物館の3つの型に分類した。後藤（1978）は、博物館地域社会の構成要素から基礎的な地域社会との相違を示した。一方、伊藤は博物館の世代変化の視点から博物館と地域との関係の変化について考察を加え（伊藤 1986）、さらに、博物館地域社会とそれに対する活動志向の違いから地域志向型、中央志向型および観光志向型の3つに分類し、固有の博物館観として主張している（伊藤 1993）。その後も地域博物館をめぐる議論が交わされ続け³⁾、増加を続けた博物館に対して地域博物館の提唱が継続された⁴⁾。

エコミュージアムについての正確な定義は存在しないが、一般的には地域に分散している空間や時間を活かした、生涯学習のための地域まるごと博物館（畔柳 1994）として捉えられている。この概念の提唱と実践は1960年代後半からフランスで行われた。日本では1980年代から地域活性化などの機運の高まりに伴い、多くの自治体で関心もたれるようになり（大原 1999）、いくつかの自治体において実践された⁵⁾。また、1995年には日本エコミュージアム研究会も設立され研究の蓄積もなされている。

地理学においては、1980年代半ばから博物館が研究の題材として取り上げられ始めた⁶⁾。1990年

代半ば以降議論が本格化し、浜田（1994）は博物館の展示における地域の地理的表現について指摘した。さらに、地理学と博物館の関わりについての可能性（辰己 1996、額田 1996、坂本 1997）が論じられ、福田（1997）は日本および英語圏の地域博物館論および博物館における地域の表現について考察している。近年では、佐川（2000）が地域博物館と地理学との関わりについて言及し、相原（2000）は博物館友の会の活動から地理の市民への普及について指摘している。また、山下（2001）および小島ほか（2005）により、観光資源としての博物館の重要性が論じられている。以上のように、地理学における博物館に関する議論は、地域と博物館の関係、展示における地域の表現方法、地理学と博物館の関係、および観光資源などに視点が当てられてきた。

このように博物館と地域との関係が議論される一方、博物館相互の関係にも目が向けられてきた。博物館法第3条9項、10項に定められた、博物館の事業に基づいて、他の博物館および教育または文化に関する施設との連携が重視され、博物館は他の施設と様々な交流を行っている。まず、都道府県などを地域単位として博物館連絡協議会が組織されている。また、美術館連絡協議会など、分野別の博物館連絡協議会なども活動を行っている。また、各博物館が行っている連携については、1992年にはすでに全国71%の博物館が相互に交流をもっており⁷⁾、盛んに交流が行われていることがわかる。また、その内容においては「資料の賃借」がもっとも多く57.2%、「出版物の交換」37.2%、「資料の交換」18.3%、「共同展の実施」9.8%、「学芸員の相互受け入れ」1.9%と続く。

博物館相互の関係については、博物館相互の連携（加藤 1980）、博物館の機能分担（定塚 1983）、合同企画展の効果（長野県信濃美術館学芸課 1989）、博物館ティーチャーズセンター（大堀 1992）および小規模な地域博物館の連携強化（須藤 2003）など様々な視点からの指摘がある。こうした議論の中で、粕谷（1996）は、地域社会型博物館において有効に機能するネットワークに

は2つ存在することを指摘している。1つは、博物館地域社会の内部において博物館とその他の社会教育施設との相互関係を示す「学社融合」ネットワークである。2つ目は、博物館相互の「モノ」、「ヒト」および「情報」の交換・交流や提供する博物館相互のネットワークである。

資料の収集・保存、調査研究、教育普及および余暇活動の機会提供など様々な機能をもつ博物館にとって、その博物館地域社会においてどのように他の博物館と競合または補完し合い共存を図るかは、増加を続ける博物館の今後の大きな課題であると考えられる。そこで、本稿では山梨県を対象とし、博物館の活動からみた博物館相互のネットワーク形成に伴う効果について考察を試みる。

II 山梨県における博物館の展開過程

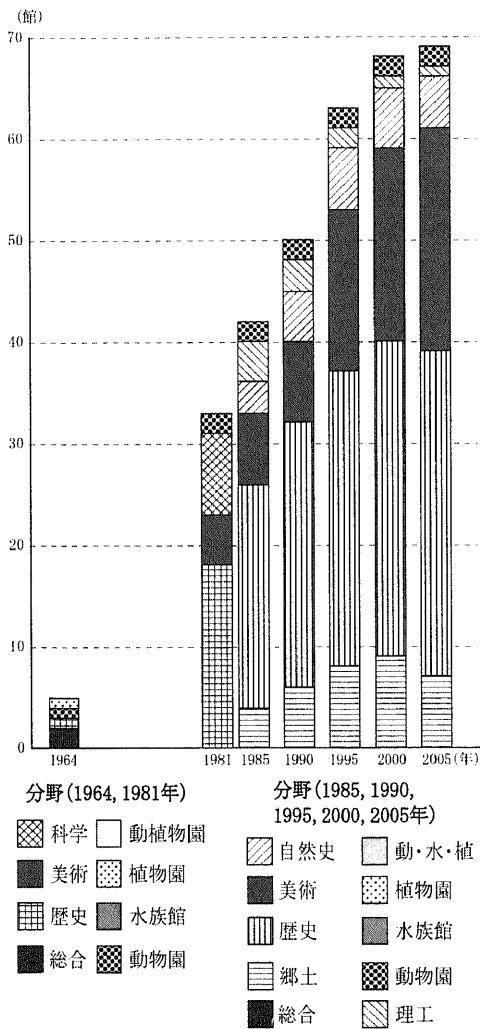
山梨県における博物館史は第二次大戦前の共進会、博覧会から始まる（小野 1989）。昭和初期には百貨店において博覧会が始まり、1934年には山梨県立図書館が展示を開始している。一方、常設展示室については、甲府市立動物園および身延山宝物館が最も古く大正期に開館した。

戦後、1951年に博物館法が制定された後、多くの登録博物館が成立した。第1図は山梨県における分野別にみた博物館数の変化を示したものである。1964年時点では、山梨県における博物館は5館のみであったが、1960年代後半および1970年代の急増期を経て、1981年にはその6倍以上に膨れ上がった。その後も博物館の増加は続き、1981年から1995年にかけては倍増している。近年では、全国的な傾向⁸⁾とは異なり、博物館数の増加は緩やかになっている。この理由として、「郷土」および「自然史」分野の博物館が減少に転じたことがあげられる。一方、「美術」系の博物館数は増加を続けており、その構成比は全国の場合⁹⁾と比べて大きいという特徴を有している。さらに、山梨県は、2004年の人口100万人当たりの博物館数が約73館と全国で3番目に多く、社会教育活動が活発に行われている地域といえる（寺本 2006）。

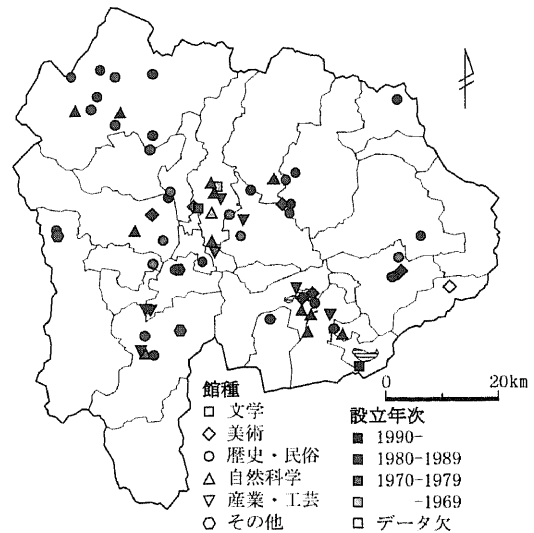
第2図は2006年の山梨県における公立博物館¹⁰⁾の分布について、成立時期および分野別に示したものである。公立博物館は67館あり、人口が集中し市街地の広がる甲府盆地に粗に分布している。館種については、「歴史・民俗」分野が多くを占め、多くの自治体がこの分野の博物館を有している。また、甲府盆地に立地するこれらの博物館は設立年次の古いものが多い。一方、河口湖周辺¹¹⁾や清里高原にも多く分布しているが、その多くは

1990年代以降に設立された比較的新しいものである。

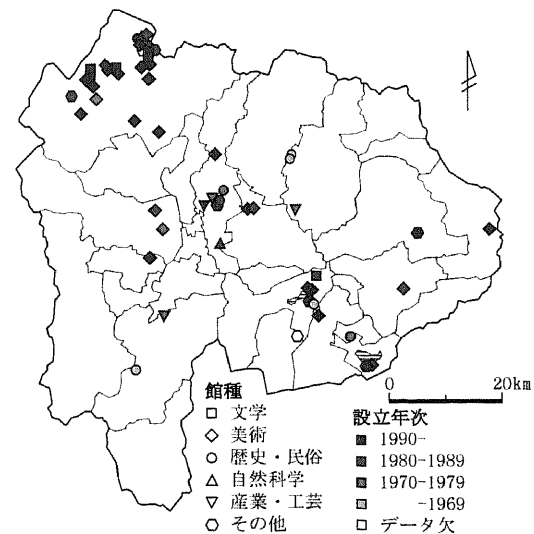
一方、第3図は私立博物館の分布である。県体館で55館あり、館種は多様であるが、美術館が多い傾向がある。とくに、これらは美術の里、芸術



第1図 山梨県における館種別博物館数の推移(1964~2005)
(日本博物館協会資料より作成)



第2図 山梨県における公立博物館の分布(2006)
(山梨県教育委員会資料、山梨新報社資料および各館資料より作成)



第3図 山梨県における私立博物館の分布(2006)
(山梨新報社資料および各館資料より作成)

の里としてのイメージが形成された清里高原周辺（佐々木 1998）に集中している。これらは、1980年代以降の清里高原のファッション化時代（浦 1998）に設立されたものである。また、公立博物館と同様に、人口の集中する甲府盆地およびの河口湖周辺にも多く立地している。

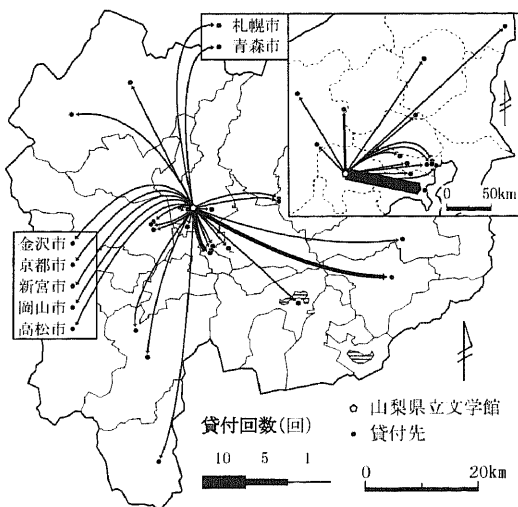
Ⅲ 山梨県の博物館ネットワーク

Ⅲ-1 各博物館の活動による既存のネットワーク

本章では、博物館のもつ既存のネットワークの特徴およびハブ博物館ネットワーク構想によるネットワーク活用の事例を示す。

まず、「モノ」についての博物館相互のネットワークについてみると、所蔵資料の貸借による事業連携がある。第4図には山梨県立文学館の収蔵資料貸付先を示した。その貸付先は県内だけでなく、県外にまで広がっている。とくに関東に多いが、かなり広範な地域に及んでいる。また、横浜市の貸付先のように、頻繁に貸借関係を有する施設もある。

次に、展示活動における展覧会の開催方法につ



第4図 山梨県立文学館の所蔵資料貸付先
(1988～2003)

(山梨県立文学館資料より作成)

いてみる。これは一時的なものが多いと考えられるが、博物館のもつネットワークとして最も活用頻度が高い。山梨県立美術館の場合、1988年7月から2005年3月までの期間、常設展以外の展示会が126回開催されていた。このうち45.2%にあたる59回が共催であり、うち9回は海外の団体との共催であった。美術という分野の特徴を反映し、特別展示の開催には広範なネットワークが必要とされていると考えられる。

次に、広報活動に注目する。山梨県立博物館における展示に関する広報活動の場合、ポスターなどの案内の送付先は、各都道府県立博物館、山梨県内の博物館およびこれまで案内が送付された博物館である。パンフレットの送付は、最も希薄で一方的な関係の1つではあるが全国的であり、広範囲なものとなっている。このように、博物館は、広告物配布、資料の貸借およびモノ・ヒトの流れなどについて、独自のネットワークを有している。

Ⅲ-2 ハブ博物館ネットワーク

1) ハブ博物館ネットワークの構築

山梨県立博物館の設立は1994年の「山梨県幸住県計画」において県立博物館の整備が打ち出されたことに端を発する。その後、博物館に関する委員会、談話会および協議会活動を経て、2005年10月15日に笛吹市に開館された。「歴史、民俗等に関する県民の知識を深め、教養の向上を図り、もって県民文化の発展に寄与する¹²⁾」ことを目的とし、歴史に重点をおいた博物館、参加体験・交流型博物館、ハブ博物館および成長する博物館が基本的な性格として定めてられている。

ここで特筆すべきは、3つ目の性格としてあげられているハブ博物館である。これは、まず山梨県内各地の自然・文化遺産、文化施設および産業と地域博物館をコアとしてエコミュージアムを形成する。さらにそれらエコミュージアムが山梨県立博物館をハブとして相互に結びつき広域的なネットワークを形成する構想である。第5図はハブ博物館ネットワークを構成する76の博物館を示している。それらの博物館は、ほとんどの自治体

に分布しており、多様な分野の博物館が参加していることが看取できる。

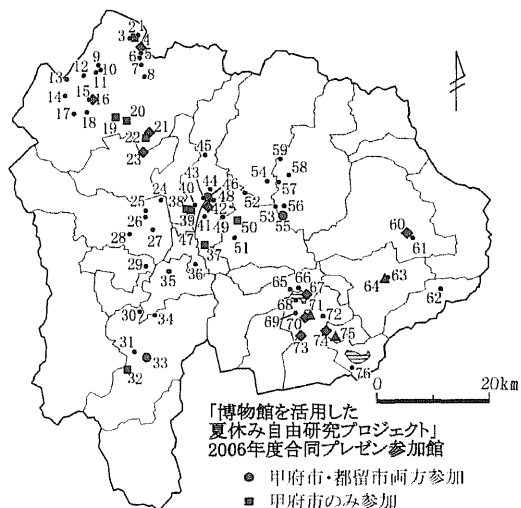
2) ハブ博物館ネットワークの活用事例ー「県民参画事業」

山梨県立博物館はその開館以前から、NPOの「つなぐ¹³⁾」と協働し、2003年度11月から「県民参画事業」として3種類の事業¹⁴⁾を開催している。1つは「収蔵品ゆかりの地ツアー」である。博物館が有する収蔵品について、それらが以前実際に使用されていた場所に赴くツアーである。この事業は、県民が地域の歴史をその現地において再発見する効果が期待されている。2つ目は「交流拠点形成事業」と称し、県内各地の歴史・文化について探訪する半日ほどのツアーである。これは県立博物館とハブ博物館ネットワークを構成する県内各拠点との繋がりを強化する役割を有している。3つ目は「わいわいミュージアム」であり、県内の各文化施設において、博物館および地域に関する談話会を行うものである。これにより、開館以前から博物館の活動を広域的に展開させ、ハブ博物館に対する理解と認識の普及を図っている。

第6図は、上記の3つの事業の開催地を示したものである。いずれも事業も県内の様々な地域で開催されており、サービスの広域化が積極的に行われていることが看取できる。とくに「収蔵品ゆかりの地ツアー」は、甲府城や武田家について行われることが多いため、甲府市に集中している。また、甲府市のように人口規模の大きな都市で効率的に事業の浸透を図られていることがわかる。また、「交流拠点形成事業」は笛吹市で集中して行われており、県立博物館の立地する地域周辺のネットワーク拠点の強化を開始している。

3) ハブ博物館ネットワークの活用事例ー「博物館を活用した夏休み自由研究プロジェクト」

山梨県立博物館は、2003年度より「博物館を活用した夏休み自由研究プロジェクト」事業を行っ

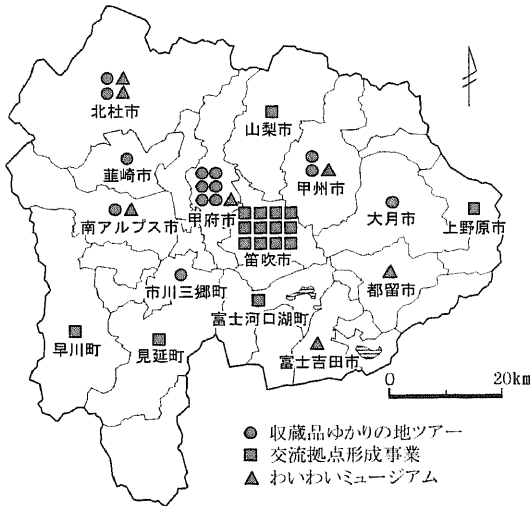


「博物館を活用した夏休み自由研究プロジェクト」2006年度合同プレゼン参加館

- 甲府市・都留市両方参加
- 甲府市のみ参加
- ▲ 都留市のみ参加
- ◆ ミニブックのみ参加
- その他のネットワーク構成館

- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. 田中浩彦美術館 | 42. 山梨中銀金融資料館 |
| 2. キープ協会ネイチャーセンターやまねミュージアム | 43. 山梨玉石博物館 |
| 3. ホール・ラッシュ記念センター | 44. 甲府市藤村記念館 |
| 4. 清里北澤美術館 | 45. 昇仙峡影絵の森美術館 |
| 5. 黒井健絵本ハウス | 46. 山梨県立科学館 |
| 6. 絵本ミュージアム清里 | 47. 甲斐善光寺宝物館 |
| 7. 清里フォトアートミュージアム | 48. かみてらす |
| 8. 須玉歴史資料館 | 49. 甲府市民俗資料館 |
| 9. ハッポウ泰雲書道美術館 | 50. やまなし伝統工芸館 |
| 10. 平山郁夫シルクロード美術館 | 51. 笛吹市八代郷土館 |
| 11. 三分一湧水館 | 52. 笛吹市春日居郷土館・小川正子記念館 |
| 12. 小淵沢絵本美術館 | 53. 笛吹市青楓美術館 |
| 13. 小淵沢郷土資料館 | 54. 山梨健笛吹川フルーツ公園・くだもの館 |
| 14. サントリーウイスキー博物館 | 55. 釈迦堂遺跡博物館 |
| 15. 清春白樺美術館 | 56. ぶどうの国文化館 |
| 16. 長坂郷土資料館 | 57. 甲府市民文化会館 歴史民俗資料室 |
| 17. 尾白の森美術館 | 58. 山高野家住宅(甘草屋敷) |
| 18. 白州郷土資料展示室 | 59. 信玄公宝物館 |
| 19. 北杜市オオムラサキセンター | 60. TEPCO 葛野川水館 |
| 20. 須玉美術館 | 61. 大月市郷土資料館 |
| 21. 明野子ども美術館 | 62. ギャラリー水源の森 |
| 22. 明野歴史民俗資料館・北杜市埋蔵文化センター | 63. 都留市商家資料館 |
| 23. 韮崎市民俗資料館 | 64. ミュージアム都留 |
| 24. 八田ふるさと文化伝承館 | 65. 大石袖伝統工芸館 |
| 25. 南アルプス市立白根桃源美術館 | 66. 久保田一竹美術館 |
| 26. 南アルプス私立春山美術館 | 67. 富士河口湖町 河口湖美術館 |
| 27. 嘘月美術館 | 68. 河口湖ミュージアム 与 勇輝館 |
| 28. 県民の森 森林科学館 | 69. 河口湖フィールドセンター |
| 29. 増穂町民俗資料館 | 70. 山梨県立富士ビジターセンター |
| 30. 身延町なかとみ現代工芸美術館 | 71. フジヤマミュージアム |
| 31. 富士川ふるさと工芸館 | 72. 山梨県立郡内地域産業振興センター |
| 32. 身延山宝物館 | 73. 環境省 自然環境局 生物多様性センター |
| 33. 甲斐黄金村・湯の奥金山博物館 | 74. 富士吉田市歴史民俗博物館 |
| 34. 美枝きもの資料館 | 75. 山梨県立富士湧水の里水族館 |
| 35. 大門碑林公園(ひらしお源氏の館) | 76. 山中湖文学の森 三島山紀夫文学館 |
| 36. 中央市豊富郷土資料館 | |
| 37. 山梨県立考古博物館 | |
| 38. 山梨県立美術館 | |
| 39. 山梨県立文学館 | |
| 40. クリスタル・ミュージアム | |
| 41. 甲府市遊亀公園付属動物園 | |

第5図 山梨県博物館ハブ博物館ネットワークを構成する博物館(2006)
(山梨県立博物館資料より作成)



第6図 山梨県博物館による県民参画事業の開催市町村 (2003~2006)

注:「わいわいミュージアム」については開館後、県立博物館で行っているため、開館以前の事業のみを示した。

(山梨県立博物館およびNPO「つなぐ」資料より作成)

ている。これは、第5図に示した26の博物館¹⁵⁾が、県内の小・中学生を対象に夏休みの自由研究のサポートを行う事業である。この事業は、主に参加館による小・中学校の夏休み直前の連休に行われる合同プレゼン、および参加各館による夏休み期間中の自由研究サポートから構成されている。前者は、県内2ヶ所において行われ¹⁶⁾、2005年度には参加者がおよそ1,000人に達しており、ハブ博物館ネットワークを活用した事業のうち最も大規模なものである。

甲府市の合同プレゼン会場には、参加各館のブースと参加館の作成したミニブック配布所、イベント用広場、休憩所が配置されている。午後1時30分から4時30分の3時間、途中クイズ大会のイベントをはさんで行われる。入場は無料で、入場者は入場すると自由にブースへ行き各館のプレゼンに参加できる(写真1)。

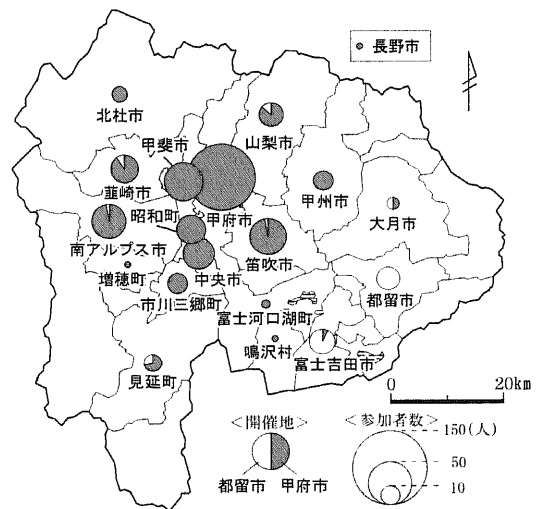
来場者調査によると、参加児童の学年は小学校中学年が40.1%で最も多く、低学年25.3%、高学年29.8%、中学生8.0%と続く。参加した306組の97.1%にあたる297組が大人と同伴で来場してい



写真1 2006年度「博物館利用した夏休み自由研究プロジェクト」合同プレゼンの様子
参加者は各博物館のブースへ行き、プレゼンに参加する。多くは親子連れであり、親子で参加する姿が目立った。

(2006年7月筆者撮影)

る。第7図はその参加者の居住地を示したものである。参加者の多くは甲府市で開催された合同プレゼンに参加している。都留市開催の場合には、参加人数も少なく集客圏も狭い。一方、甲府市開催の場合には、参加者の居住地は多くが甲府市周辺の甲府盆地内が多くを占めるが、山梨県北西部



第7図 2006年度「博物館を利用した夏休み自由研究プロジェクト」参加者の居住地 (山梨県立博物館資料より作成)

など県内の広い範囲から多くの参加者を集めている。

第1表は合同プレゼンの参加者を対象としたアンケート結果である。まず、事業の情報源は、「博物館だより」がほとんどであり、参加理由に関して「面白そうだった」という回答が約半分を占めることから、県内すべての小中学校に配布された広報の効果が窺える。このことは、9割以上が再参加の意向を有するにもかかわらず、8割以上の初参加者を生じさせている要因であろう。また、参加理由について「家族の誘い」が3分の1を占めることは、前述のように多くの参加者が大人と同伴する理由の1つと考えられる。さらに、再参加の意向が強く、およそ半数が自由研究において博物館を利用することを考えており、事業の成功が看取できる。参加者の6割以上が年に1回以上館博物館を利用しており、参加者の多くは博物館の利用に積極的である場合が多い。以上のことから、この事業の参加者は、大規模な広告効果による初参加者および博物館を有効に利用しようとするリピーターから構成されていると考えられる。

第1表 2006年度「博物館を利用した夏休み自由研究プロジェクト」参加者の属性

a)本事業への参加経験				
回答	有	無		
構成比(%)	13.9	86.1		
b)本事業の情報源				
回答	博物館だより	友人	県のホームページ	その他
構成比(%)	85.5	4.8	1.2	9.7
c)参加理由				
回答	研究テーマの発見	面白そうだった	前回は楽しかった	
構成比(%)		39.4	50.9	7.9
回答	友達の誘い	家族の誘い	学校教諭の勧め	その他
構成比(%)	3.0	32.7	1.2	0.6
d)再参加の意向				
回答	有	無		
構成比(%)	92.7	6.1		
e)自由研究における博物館利用の意向				
回答	有	無	不明	
構成比(%)	52.7	1.8	45.5	
f)博物館の来訪頻度				
回答	なし	授業で利用	1~2回/年	3回/年以上
構成比(%)	22.4	17.0	44.2	16.4

(山梨県立博物館アンケート調査より作成)

IV 博物館地域社会拡大とその機能地域化

一むすびにかえて一

博物館の増加に伴い、博物館と地域のあり方が日本各地で議論され、また実践されてきた。また、この議論の中、博物館相互の連携、交流および協力といったいわゆる博物館ネットワークも注目された。本稿では、その一端として1994年に計画され2005年に山梨県のハブ博物館として設立された山梨県立博物館の活動を中心に、山梨県における博物館の展開過程およびその機能化といえるハブ博物館ネットワークについて分析・考察を行った。山梨県におけるハブ博物館ネットワークは、博物館地域社会に以下の2つの効果を生み出したといえる。その1つは博物館地域社会の広域化である。前述した「県民参画事業」は、事業の種類で偏りはあるものの、県内の様々な地域でサービスの提供を行っている。今まで博物館地域社会の居住者は博物館を来訪することでそのサービスを受けていた。しかし、事業の遂行によって、博物館が存在する地域において主に現地を題材とした事業への参加が可能となった。換言すると、既存の博物館地域社会に加え、異なった性格の博物館地域社会が形成されたといえよう。また、「博物館を活用した夏休み自由研究プロジェクト」においては、いくつかの博物館が共同で事業を行うことにより、全県的に大規模な広報活動事業が展開され、そのイベントを広く周知させることが可能となった。さらに、複数の博物館による合同プレゼンでは、各博物館の専門性が活かされた大規模なイベントを行うことができた。その結果、県内全域からのイベント参加者を引きつけることに成功したと思われる。これは、周辺住民が利用者の多くを占める地域志向型博物館、または周辺住民の利用者の少ない観光志向型博物館双方にとっても、これまでの博物館地域社会の空間的範囲を越えた県民にサービスの提供が可能になったことを意味する。

もう1つの効果は、博物館地域社会の機能地域化である。すなわち、博物館ネットワークは、従

来は独立的に存在していた博物館地域社会に対して、新たに階層的な関係を生じさせた。これまで、サービス供給において、博物館は基本的に単独で事業を実施してきた。しかし、共同事業を行うことにより、各博物館の専門性、さらに共同の規模を活かした事業が展開できる。また、サービスの内容についても、個々の博物館の専門的な知識および技術を活かした多様な教育機会および余暇活動の場の提供が可能である。さらに、参加者はそれらの事業を通してその他の博物館の情報を入手可能になる。すなわち、博物館の側からは、ハブ博物館ネットワークを介して、新たなサービスを提供することができる。また、博物館利用者の視点からは、ハブ博物館ネットワークを介して、その他の博物館のサービスを受けることができる。

これは、これまで個々の博物館が作り出す博物

館地域社会に、ハブ博物館ネットワークの作り出した博物館地域社会が階層的に加わること、さらに、それまで曖昧で疎であった山梨県内の博物館地域社会の強化を意味しているといえよう。

現在、住民の博物館に対する志向も多様化しており、博物館とサービスと地域住民の要求が完全に一致しないことはやむを得ないことである。しかし、博物館ネットワークによる地域博物館の広域化および機能地域化は、住民と博物館との乖離を解消する一助になりうるといえる。現在、ハブ博物館ネットワークは博物館のサービス提供における繋がりが主である。ネットワークのより有効な活用のために、今後、博物館の利用者がより容易にハブ博物館ネットワークを活用できるための働き掛けが望まれるだろう。

本稿を作成するにあたり、山梨県教育庁学術文化財科、山梨県立博物館、山梨県立美術館、山梨県立科学館、山梨県立文学館、山梨県立考古博物館、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県甲府・国中地域地場産業振興センター、山梨中銀金融資料館の方々に、資料の提供およびお話を賜るなど、多大なご協力頂きました。アンケート調査に際しては、山梨県立博物館の植月学氏には多大なるご協力を賜りました。また、本研究の進捗に関して、手塚章先生、呉羽正昭先生をはじめとする筑波大学大学院生命環境科学研究科の諸先生からご指導賜りました。筆末ではありますが、記して感謝申し上げます。

[注]

- 1) 伊藤 (1993) は、1960年代以降の博物館の急激な増加時期を「博物館ブーム」と称している。
- 2) これらの経緯に関して、1969年の雑誌『博物館研究』42(3)において「大衆－地域社会－博物館」として座談会が組まれた。また、増田 (1970) などがある。
- 3) 1984年に雑誌『民具マンスリー』、1985年に雑誌『地理』、および1990年に雑誌『歴史評論』において地域博物館を議題とした特集が組まれている。
- 4) 村上 (1995)、加藤 (1996)、村上 (1997)、上井 (1998) および日本展示学会編 (2001) などがあげられる。
- 5) それに関する報告としては、日本エコミュージアム研究会編 (1997) および小松編 (1999) などがある。
- 6) 1984年、雑誌『地理』において、「情報化時代の博物館」として特集されている。
- 7) 日本博物館協会の調査による。
- 8) 全国博物館協会の資料によると、山梨県で博物館数の増加が鈍化し、およそ10%のみ増加であった1995年から2005年の10年間において、全国では約23%の増加を示している。
- 9) 全国博物館協会の資料によると、全国的には、美術分野の博物館数の構成比はおよそ22%ほどである。
- 10) 本節で示した博物館は、資料の特徴上、登録博物館以外のものも含むため、前節で具体的な数字で示した山梨県の博物館数より多い。
- 11) 1989年度の「第3次河口湖町総合計画」のふるさと創生事業および地域総合整備事業債活用事業などにより、各種施設が設置された (浦 1998)。

- 12) 「山梨県立博物館設置および管理条例（平成17年度山梨県条例第8号）」による。
- 13) 「つなぐ」は、博物館、文化財および山林などの様々な資源に対し、市民が親しみをもつような事業を実施している特定非営利活動法人である。実際の事業として、利用者の側からの博物館の使用方式の模索、および利用者の視点からの博物館の評価などを行っている。
- 14) 参加者が数10人から200人と多様な規模の事業を、2ヶ月に1回ほどの頻度で行っている。
- 15) この事業への参加する博物館は毎年異なる。
- 16) 会場は毎年異なり、2006年度の場合、甲府市は山梨県立産業展示交流館のアイメッセ山梨において、都留市は山梨県立男女共同参画推進センターのびゅあ富士において行われている。また、これらの会場および参加博物館の案内は山梨県立博物館によって、山梨県内のすべての小中学校に配布される。

【文 献】

- 相原正義（2000）：博物館友の会の活動と地理。法政地理, 31, 10-20.
- 伊藤寿朗（1979）：博物館と地域。平塚市博物館年報, 3, 61-66.
- 伊藤寿朗（1986）：地域博物館論－現代博物館の課題と展望。長浜 功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店, 233-296.
- 伊藤寿朗（1993）：『市民のなかの博物館』吉川弘文館。
- 浦 達雄（1998）：『観光地の成り立ち－温泉・高原・都市－』古今書院。
- 小野正文（1989）：山梨県博物館史。國學院大學博物館學紀要, 14, 40-47.
- 大原一興（1999）：『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会。
- 大堀 哲（1992）：博物館ティーチャーズセンターの活動と博物館相互間にネットワーク形成の方向性。博物館研究, 27(9), 4-9.
- 額田雅裕（1996）：地域博物館・学芸員の現状と博物館活動の地理的分野。立命館地理学, 8, 39-49
- 粕谷 崇（1996）：博物館ネットワークシステム－生涯学習時代における博物館活動の在り方－。國學院大學博物館學紀要, 21, 223-236.
- 加藤有次（1977）：『博物館学序論』雄山閣。
- 加藤有次（1980）：今日の現状と課題。加藤有次編『博物館学講座 第3巻 日本の博物館の現状と課題』雄山閣, 127-143.
- 加藤有次（1996）：地域博物館の目的理念及び建設要件に関する一考察。國學院大學博物館學紀要, 21, 1-29.
- 加藤有次（2000）：博物館と地域社会。加藤有次・鷹野光行・西 源二郎・山田英徳・米田耕司編『新版博物館学講座 3 現代博物館論－現状と課題－』雄山閣, 23-41.
- 上井久義（1998）：地域博物館の時代。博物館研究, 33(2), 4.
- 小島大輔・中村裕子・久保倫子・呉羽正昭（2005）：下諏訪宿の機能および景観の変化。地域研究年報, 27, 19-40.
- 後藤加民（1978）：博物館の運営と職員。伊藤寿朗・森田恒之編『博物館概論』学苑社, 364-392.
- 小松光一編（1999）『エコミュージアム－21世紀の地域おこし』家の光協会。
- 坂本育男（1997）：人文地理学と地域歴史博物館。立命館地理学, 9, 67-75.
- 佐川和裕（2000）：「博物館・資料間と地理学」－学芸員の立場から－。法政地理, 31, 3-9.
- 佐々木 博（1998）：イメージが創った観光地清里高原。人文地理学研究, 22, 27-57.
- 定塚武敏（1983）：公立博物館の機能分担および相互連繫について。博物館研究, 18(5), 1-6.
- 須藤茂樹（2003）：さまざまな博物館「連携」の試みをめぐって－模索・小規模地域博物館のこれから－。國學院大學博物館學紀要, 28, 105-124.
- 辰己真知子（1996）：博物館の現状と地理学の役割。立命館地理学, 8, 19-38.
- 寺本 潔（2006）：社会教育。山本正三・谷内 達・菅野峰明・田林 明・奥野隆史編『日本の地誌2 日本総論Ⅱ（人文・社会編）』朝倉書店, 118-121.

- 長野県信濃美術館学芸課（1989）：長野県内の美術館・博物館による合同企画展の試み。博物館研究，24（1），32-34.
- 日本エコミュージアム研究会編（1997）：『エコミュージアム・理念と活動－世界と日本の最新事例集－』牧野出版.
- 日本展示学会編（2001）：『地域博物館への提言』ぎょうせい.
- 日本博物館協会（1993）：博物館における交流や他機関との連携について。博物館研究，28（11），12-21.
- 浜田弘明（1994）：近郊都市の博物館における地理的課題－現代的視点に立った博物館活動に向けて－。法政地理，22，95-109.
- 福田珠己（1997）：地域を展示する－地理学における地域博物館論の展開－。人文地理，49，442-464.
- 武士田 忠（1990）：都市における地域博物館の課題。民具マンスリー，23（4），16-21.
- 増田 洋（1970）：博物館と地域の結びつき。博物館研究，43（3），27-33.
- 村上義彦（1995）：『新しい地域博物館活動』雄山閣.
- 村上義彦（1997）：『地域博物館概論』雄山閣.
- 山下亜紀郎（2001）：諏訪湖畔における観光資源の多様性と地域間提携。地域調査報告，23，135-145.